

全国初

日本ミツバチ 交尾の場所発見

日本ミツバチの研究

縁あって、日本ミツバチを研究する「日本在来種みつばちの会」の会長でもある私には、一つの研究テーマがあった。日本ミツバチの重要な生命の受け渡しが行われる空中での結婚（交尾）場所を、養蜂家のみ

ならず、誰一人として見たことがない。人生の80年以上をほとんど毎日養蜂に費やし、人一倍研究熱心だったはずの私の祖父ですら「死ぬ前に一度は見たいものだ」と、幼かった私に話したことをいまでも覚えてい。養蜂家だけでなく、日本ミツバチに興味を持った人すべてにとって、交尾場所の確認は、永遠のロマンだったのだ。私はこの結婚場所を発見しようと思ったのである。もし発見できれば、「日本在来種みつばちの会」は、ミツバチ研究の歴史のページを飾れる。養蜂家は学者よりもミツバチに接する時間が長く、しかもミツバチの気持ちがあつてい。その意地とロマンにかけて、私がその場所を見つけてみせる。そんな思いに駆られてのことである。

1990年4月、具体的な調査を開始した。「日本在来種みつばちの会」の有志にも多数協力してもらっ

て、付近の野山を思いつくかぎり歩

き回った。そして肉眼では発見でき

ないのではないかと考え、倍率の高

い双眼鏡を買って、ひたすら見て回

ったが、結婚場所は見つからなかつ

た。調査に慣れて眼が利くようにな

つてきたあるとき、私は木の頂の少

し上方でいろいろな昆虫が飛び回っ

ているのを眼にした。ほとんどがア

ブや力の類だったが、それに紛れて

なじみのある飛び方をするミツバチ

らしきものが遠目でも見られた。虫

たちが飛び回っている木の種類を調

べてみると、不思議と、たいていがケ

ヤキであること分かってきた。そこ

でケヤキにしぼって観察を行うこと

にした。ケヤキがたくさんある場所

は……思い当たるのは神社である。こ

うして私が日本ミツバチを飼ってい

る場所から約1キ口離れたところに

ある川留稲荷に焦点は絞られていっ

た。ここは巨大なケヤキがご神木

で、ケヤキが林立していたのだ。

そして一ヶ月あまりが過ぎた。忘

れもしない5月中旬。5月にしては

暑くてたまらない日の午後1時ご

ろ、双眼鏡の焦点をご神木の梢に合

わせ、確信をもってなめるように見

つめていた。しかし1時間以上が見

したが、何もみえない。『なんだ直感

は当たらなかつたのか』。そう思う

と力が抜け、あきらめの気分になっ

てきた。やけになつてケヤキの梢の

はるか上空を飛び交うトビやツバメ

に焦点を移した瞬間、双眼鏡を通し

て何かぼんやりしたものを目に入

った。それをよく見ると、多数の小

さな昆虫だった。高さは100mに

近い上空だった。しかも数も多く10

匹や20匹ではない、何十何百とい

う数だ。あれがほんとうに日本ミツバ

チだとしたら!?ようやく念願の結

婚場所を見つけたのかも知れな

いとの期待感と同時に、自分も含め

てほかの人にどうしたら確認が示

せるかという難問に思いを巡らせ

た。そして6月になった。

感激の新発見

私が家業の養蜂とアイスクリー

ム製造の仕事もそっちのけで、昼

間から双眼鏡を片手に、研究と称

して歩き回っていたので、とうと

う父に、こういわれてしまった。

「学者が発見できないものを、お前

に見つけられるわけがない。かり

に見つけたものが本物でも、10

0mも上空の出来事をどうやって

証明するのだ。止めてしまえ」。し

かし、私には確信があつた、発見

まであともう一步。いまをのがし

たら二度とチャンスはない。あと

一ヶ月だけ続けさせてほしいと交

渉し、父は「それではあと一週間

だけ猶予を与える、それ以上はダ

メだ」といった。

それからは寝ても覚めても検証方法を考え続けた。生物学の先生にもたずねて、比較的大量に生産できる西洋ミツバチの女王蜂でも、日本ミツバチのオスたちに対して似たような効果が得られるらしいことが分かった。さらに、もう寿命がつぎる女王蜂をアルコールに漬け込んだエキスでも、女王物質（オスバチ誘引フェロモン）の効果があるらしいことも分かってきた。そこでさっそくエキスを作り、綿にひたしたものを、女王蜂の代用とすることにした。

次にオスをどのように捕えるかを考えた。気球につきしたが、交尾のテリトリーの外である採集網の届く高さまで、オスバチたちが下りてくるのは望み薄だった。バツとひらめいたのは、幼いころ台所や便所にぶら下がっていたハエトリ紙。こちらから捕らえるの

でなく、オスバチにくっついてもらえばいいのだ。最後に残った難問は気球だった。空に浮かばせるためのヘリウムガスが手に入らない。万事窮す。約束の一週間もすでに4日が過ぎようとしている。だめかもしれない。ところが、ある友人が「昨日、近くの公園でテキ屋さんがヘリウムガスを詰めながら風船を売っていたよ」と知らせてくれた。準備は出来たが、運悪く雨が2日間続く。

約束の最終日、午後2時過ぎにウソのように雨がやんだ。神社に着いたのは午後3時過ぎ。オスバチの結婚飛行時間は午後4時頃まで。残り1時間もない計算だ。一発勝負に挑むことにした。最後の望みをかけた風船はスルスルと上昇した。ケヤキの巨木の上に出て、さらに上昇していく。奇跡的に風がぴたりとやんでいたのだ。

風船の下にぶら下がっている女王フェロモンの綿の周囲数メートルに、何か黒い物体がうねりながら動いている。これは、おびただしい数の日本ミツバチの塊だったのである。私は慎重にリールをたぐって、風船を回収した。私はほんとうに涙があふれてきた。風船につけたハエトリ紙には日本ミツバチのオスが、10匹以上くっついて、ビービーと羽を振るわせていた。

この発見はドイツの国際論文誌で受理していただき、世界中の研究者の注目を集めることになった。こうして「日本在来種みつばちの会」の歴史にひとつの金字塔がたてられた。

現在は、「日本みつばちの里」づくり構想として、地元盛岡市近郊の飛鳥地区に、研修と実験のための宿泊をかねた施設整備を進めているところである。